

の眼にも暗い色が見えた。

困ると云ひながら子供にメリンスの着物を着せて置くの、何時も丸髷を綺麗に結つて居るの、自分でぐるぐる巻きにしたら髪結銭が出なくつて好ささうなもの、と皆眼をくりくりさせて細かい事まであ、斯う陰口云ふ、それだけでももうお多美は、嫌になつた。「困つても好いわ、又東京へ行きたい」と恁麼事まで云ふ様になつた。

「静ちゃんは東京と此處とどつちが好いの？」と幾度も聞いた。

「お母様、東京へ歸りませうよ、私淺草の花屋敷へ行きたいわ」と静子が毎日煩さい様に云ふのを知つて居ながら、わざと聞いて見るのだ。

「それは東京が好いに定つて居てよ」と静子が淀みなく云ふのを聞くと、お多美は、斯う何か小さいものに勝ち誇つた様な、何處か心強い様な氣がして、

「さう、お母様も東京が好いのよ」と莞爾して見せた、静子はそれを何處へも行つて話した。

「叔母様、東京は好い事よ、一寸お買物に行くにも電車に乗つて行くんですしネ、お水は汲まなくつても獨りでお勝手へ來て居てよ、私は東京が好よ、お母様も復行きたいつて云つて居るわ」と、皆が喫驚する程ませた事を云つて歩いた。

「其麼に東京が好ければ何故歸つて來たんだらう。散々贅澤して居て、困るからもよく云へたものだ。又行きたければ行くが好い」と親類の者は皆斯う思つて居た。
お多美は、静子が親類へ行つて色々云ふ事など少しも知らないで居る。唯親類の仕打ちが餘りだと曇つた顔をしては、ぶつ／＼云つて居る。

轉宿

此前の日曜に此處へ越しました。

「又春さんは……」と云はないで、何ぞ許して下さいまし。あ、朝から晩まで赤子に泣き立てられては、とても勉強が出来ないんですもの。

「春江さん、貴女は又轉宿なさいましたの」といふ貴女のお手紙を見るのが辛くて、今まで我慢はして居ましたもの、もう堪らなくなつて越したんですから……。今度は屹度、落着いて居ます。

此處は静かな好い家です。家族は六十近いお婆さんと義勝さんと云ふ銀行員の息子と、其嫁様の三人です。下は二疊の取次に、六疊の茶の間と、小綺麗な八疊の座敷、それに南向の小さい勝手がついて居ます。けれども下はさう私に關係がありません。唯朝晩御飯を食べに下りるだけです。

私の間は、二階の六疊、南向で明るいのには疊が新しくして、大變居心地の好い部屋です。是だと綺麗にお掃除する張合もありません。此家を獨りで掻き廻して居るらしいお婆さんは、一寸目の強いなかへ強固した、世話好きらしい人です。銀行員の義勝さんは、三十を一つ二つ出た位の、それは齒痒ゆい程の黙りやです。家に居

るのか居ないのか、二階に居ては一寸もわかりません。朝など私が出掛ける時、もう出勤したのかと思つて見ると、茶の間の長火鉢の前につくねんと坐つて、黙つてばかりと煙草を飲んで居ます。

色の白い温順しさうな嫁様は、先月とか嫁た許りださうです。初初しい緋鹿の子の手柄を見て、私もさうと思ひました。

夕方、街の電燈がつく頃になると、

「お貞、柴田さんに御飯さう申しておいで」と云ふお婆さんの聲が茶の間でします。するとお貞さんは、とんくと静かに階子段を上つて来て、そして皆まで上らないで、

「あの御飯を召し上つて」と優しく云つてすぐ、下りて行きます。

晩はもう、八時頃からそれはひつそりして終ひます。須美様！
私は是からみつしり勉強します。

* * * * *
今日職員會があつて、少し遅く歸ると、お婆さんは、火の無い長
火鉢の前に、むづかしい顔をして居ました。

「只今、遅くなりました」と私が優しく云つても、何時もの様に莞
爾しませんでした。

私は、什麼したんだらうと思ひながら、其まゝすぐ二階へ上つて
終ひました。さうすると、何かぐづぐづ云ふお婆さんの聲がしまし
た。私は二階から凝と聞かうとしました。と今度は

「どうも申譯御ざいません」と詫まるお貞さんの小さい聲が勝手に
しました。後はよく聞えませんでした。暫くすると、お婆さんの聲
は普通になりました。そして、

「お貞、柴田様に御飯さう申しておいで」と何時もの様に云ひ付け
ました。

屹度、一寸した粗忽を、小言がましくぐづぐづ云つて居たんでせ
う。

どうも彼のお婆さんは、一寸した事を喧ましく云ひさうに見えま
す、私はお貞さんが氣の毒だと思ひました。

* * * * *

今夜は××寺にお説教が有るつて、お婆さんが聞きに行つて留守
です。

私はお婆さんが大嫌ひになりました。此頃は無闇に、お貞さんに
當るんですもの。今朝も何か大きな聲で云つて居ました。

先刻、生徒の作文を直して居ると、お貞さんがとん／＼と上つて
来て、

「わのお手紙が参りました」と淺黄の封筒を置いてすぐ下り様とし
ましたから、

「話して被在いなネ、お姑様はお留守なんでせう」と私が心から優
しく云ふと、

「ハア有難う御ざいます」と一寸躊躇つて居ましたがすぐ安心した
様な顔をして、

「ぢや少しお邪魔致しませう」と私から少し離れて坐りました。
話して見ると、泌々とした眞實に好い人です。

「お姑様が随分お喧ましい様ネ」と私が話の中程に低い調子で云ふ
と、

「いゝえ、皆私が届かないからで御座います。度々あんな事を貴女
のお耳に入れて、眞實に私お恥しう御ざいますわ」と俯向いたまゝ、
斯う云つて、もう涙ぐんで居るんですもの。

私はつく／＼お貞さんが可哀想で溜らなくなりました。



壽美様、私わたしはもう貴女あなた、何なんと云いはれても、何どうしたつて此家このやには居ゐられません。甚どん麼なお言葉ことばでも甘あまじて受うけませう。そして其その苦痛くつうから逃のがれたいんです。

恁こん麼な性質せいしつに生うまれた私わたしは、斯かうした第だい三者しやとしての小ちひさい心こころの苦くるしみを受うけては、みつしり勉べん強きやうもし得えないで居ゐるんです。何なんて意い志しの弱よわい人間にんげんでせう。

昨日きのふの朝あさから、お婆おばさんはお貞ていさんに一こと言ごもものを云いはないで、唯ただ獨ひとりでツン／＼して居ゐます。

原因げんいんは何なにか、私わたしにはわかりません。何なんでも一ひと昨日きのふの晩ばんもう寝ねやう

とする頃ころ、何なにか突つ慥けい貪どんにかみ／＼云いつて居ゐました。

「あゝ喧やかましい、もうネお前まへになど何なんでも頼たのみやしません。決けつして仕しても貫ぬはないよ／＼なんて大おほきな聲こゑで十じ時じすぎまで云いつて居ゐました。

恁こん麼な時ときでも黙だまりやの義勝よしかつさんは、それこそウンともスンとも云いはないで矢張やっばり黙だまつて居ゐるんです。私わたしは其その態たい度どがじり／＼する程ほど齒は痒がゆくてなりませぬ。一たい體たい義勝よしかつさんは、お貞ていさんを何なんと思おもつて居ゐるんでせう。

私わたしはお貞ていさんが可哀あはれ想さうで／＼溜たまりませぬ。お婆おばさんががたびしお膳立ぜんだてなどするのを見みて、はら／＼して居ゐるお貞ていさんを見みると、絶すりついて、一しよ緒じゆに泣なきたい様やうな氣きがします。





嫌いやです。

此頃このごろは毎日まいにち學校がくかうの門もんを出でると、ほつと嘆息ためいきをつく程家ほどうちへ歸かへるのが

壽美様すみさん、許ゆるして下ください。近い内ちかうちに又何處またどこへか越こします。

寂さびしき家いえ

何なんとなく忙せはしさに見みえる夕暮ゆふぐれの街まちに、ばつと明あかるく電燈でんとうがついた。信子のぶこはそれそれを避さける様やうにして、暗くらい町まちの方ほうへと急いそいだ。

もう二月つぎも前まへから貸家かしゃの札ふだが斜なめに張はつてある家いえの前まへを通とほつて、薄うす暗くらいランプのついた荒物屋あらものやの下したの小路こうちを這入はつて、兩側りやうがはに列ならんだ同おなじ様な長家ながやを通りぬけて、一番北だんきたの端はしの、入口いりぐちに小ちひさく「森田もりた」と書かいた木札きふだの掛かけてある、暗くらい格子戸かうしどを黙だまつて明あけた。

「お信のぶかえ」と中なかから力ちからの無ない、年寄としよりの聲こゑがしてから「はア只今ただいま」



と低い聲で云つた。お信が未だ下駄を脱がない内に、茶の間の襖を明ける音がして、

「大へん今日は遅かつたネ」と、今奥で聲のした年寄が、お信を迎へた。

「え、少し簿記の方を整理して来たものですから」とお信は別に莞爾ともしないで云つた。黙つて年寄の後から茶の間へ這入ると、小さい包みを隅の方に置いて、袴もぬがず長火鉢の前へ坐つた。

老婆は勝手の方でランプをつけて持つて来た。

「お祖母さん、今夜は三七日ですネ」とお信は暗い淋しい顔をして云つた。

「あ、先刻庵主さんが来て呉れたよ」と祖母は洋燈の鉤を釘へ掛け様としては掛らないで、釘のあたりをずう／＼やつて居たが、やうやう掛つたらしく一寸引張つて見て、安心した様な顔をして、そして斯う云つた。少し洋燈のネヂを上げて、火鉢の向ふへ坐つた祖母は

「早いものだネ、もう三七日になるんだもの」と續けて云つた。

「眞實にネ、私まだ毎日歸つて来る時、家へ這入るまでお父様が寢て被在る様な氣がしますの」とお信は始めて、祖母の顔を肥と見た。

「晝間はお前も居ないし、私は寂しくつてネ」

「夕方になると格別ネ」とお信も同じ事を云つた。

二人は黙と黙つて終つた。お信の白い顔も、祖母の艶の無い顔も

沈んで居た。鐵瓶の湯がチーンと湧き出した。

お信は氣の無い様な立ち方をして、色の褪めた紫紺の袴を脱いだ。

そしてそれを疊むでもなく、隅の衣桁へ掛けて、座敷との間の襖を

そつと明けた。香の薫りがすうつと胸に迫つた。

「わらお祖母様、未だお燈明が上つて居てネ」とお信は床の間の小

さい佛壇に細く燈つて居る蠟燭を、睨と見詰みて云つた。

「あ、今夜は皆燈るまで上げて置かうと思つてネ」と祖母の聲が勝

手でした。

「まアさう」とお信は軽く答へた。

戒名の明瞭とわかる白木の位牌を見ると、もうお信は胸が一杯に

なつた。強ひてそれを避ける様に、一寸合掌してすぐ座敷を出た。

勝手の方を向いて火鉢の傍へ坐つた信子の眼は、熱い涙でぼつと

なつて居た。

「あ、私には父も母も無いんだ」と又思ひ出したのである。一杯に

溜つた涙は、はらりと留度なく頬を流れた。

生の母を知らない信子は物心つくまで、祖母を母と思つて、只祖

母に許り懐いた。そして厳格な父を酷く怖がつた。が「私の親は此

父獨りだ」と思ふ様になつてからはガラリと變つて、氣六ヶ敷い父

にそれはよく盡した。父が脊髄病でどつと床に就いてから五年の間

一日でも嫌な顔をした事がなかつた。
父は身體の自由がきかないので、氣短かに随分がみくく云ふ事もあつたが、信子は何時も晴やかな顔をして居た。無口な父は、涙の出る程信子のよく盡して呉れるのを嬉しいと思つても、決して口には出さなかつた。別に財産が有るでも無いので、生活上にも信子の家には、暗い雲がかつた。
信子は、去年女學校を卒業するとすぐ、虚榮も誇りも捨て、或る會社の事務員となつた。——例ひ少しでも其暗い雲を拂ひのけ様と思つて——。そして僅かながらも月給のすべてを、美しい眞心と共に、父の病ひを治すべく捧げた。

けれど父は遂々死んだ。
信子は、氣が狂ひはしないかと思ふ程悲しんだ。泣いて——一晩泣き明した。
顔へ白い覆ひのかつた、父の亡軀の傍に、正體もなく泣きくづれて居た信子が、ふいつと上げた其顔は血の氣など少しもなくて、びつしより濡れた頬は、凄い程青ざめて居た。
「お祖母様、私はもうお父様も母様も無い孤兒なんですわネ」と云つた信子の口唇は、びりりと慄へて居た。傍に居たものは皆、それを聞いて貰ひ泣きした。
毎日く沈んで居る信子は、あゝ私には未だ年老いた祖母が一人

あるのだ、と思ひ返して、一週間許り前から又會社へ行き始めたのである。

* * * * *

「お信」「お信！」と祖母は一寸間を置いて二度小さい聲で呼んだ。

「ハ、ハイ」凝と俯向いて考へて居た信子は、勝手に祖母の呼ぶ聲に喫驚して、どぎまぎした様に返事をした。

「お前また考へて居るのかえ、もう何と思つたつて仕方ないんだから、是までの運命とあきらめてネ……」

と祖母は、そつと戸棚を締めて、なだめる様に斯う云つた。

「え、もう思ひませぬわ」と信子は祖母に心配させまいと思つて、

わざと聲の調子を上げて云つた。そして頬に流れた熱い涙をそつと拭いた。

「さあ何にも忘れて、機嫌よく御飯を食べてお呉れ」と祖母は二つの膳を運んで來た。

「あらもう御飯？　まあお手傳ひしないで済みませんでした」と晴れやかに云つた。慰めて呉れるお祖母さんの顔だつて、何時も寂しく曇つて居るのだもの。あ、私は此老先き短かいお祖母さんを、心から慰めなければならぬのだ、と思つて――。

三分心のランプをねぢ上げて、二人は膳に向つた、座敷の方から幽かに線香の烟りが漂よつて來る、黙つて食べて居る二人の顔は、

矢張り寂しかつた。

K
さん

私の級にKさんといふ人があつた。Kさんは級での注意人物だつた。什麼いふ性格の人だか、誰にもわからなかつた。随分皆が、竊に観察したものだか、誰にもわからなかつたらしい。

Kさんには親しい友が無かつた様だ。毎朝彼の湯福の上の坂道をそれこそ一寸の傍見もしないで登つて、又同じ道を唯一人、すたすた歸る姿は、誰も見るけれども、燃える様な虞美人草の咲いた花壇の邊りで、友と親しさに語つて居る處など見たものがない。

北の窓際の席に居るKさんは、何の時間でも質問などした事が無い。又自分から進んで答へる様な事もなかつた。

よく當番の人が放課後日記を附ける時、

「鳥渡、今日松井様は缺席でせう」と聞いては、

「否、出席よ、嫌なお當番ネ」と云はれても、未だ不審さうな顔を

して、

「さう？ 左様か知ら、餘り温順しくてわからないわ」などと云つ

たものだ。

けれど毎週一度づゝKさん、専有の時間があつた。それは、金曜

の四時間目の代數だ。

「實際不思議ネ、代數の時計りは香代さんの頭が什麼働くのかわか
らないわ」

「眞實にネ、確に松井様の腦は好いに違ひ無いのよ」

「ぢや何故もつと、はきくやらないんでせう」と云ふ言葉は、何
時も級友の中に取り換はされて居た。

二次方程式の泣きたい様なを出題されて、皆青くなつて考へて
居るのに、Kさんはもう何の苦も無い様な顔をして、羽織の紐を弄
つて居るのだもの。實際代數の時間になると、Kさんが羨しかつた。

「さあもう少し考へて御覽なさい」と皆の怪しげな解き方を覗いて
見れば、小さい聲で斯う云ひながら、A先生はKさんの處へ行くと、

何時も、

「もう出来ましたか」と、先づ感歎詞を發して、それから靜かに解き方を見た、

「好う御座います」と底に力のある低い聲が教室内に響くと、皆の視線は一時にKさんに集まる。それでもKさんの顔には、誇りの色など露程も無かつた。別に顔を赤くするでもなく、相變らず褪めた羽織の紐を弄つて居る、A先生は決してすぐKさんに式を解かせた事がない。屹度誰かに覺つかない解方を、麗々と黒板でさせて、散ざ批評をした其後で、始めてKさんに正しい解方を書かせた。

自分の出来ないのは棚へ上げて、A先生の仕打ちが餘りだ、と故

意とKさんに聞えよがしに、聲高に云つた人もあつた。そんな事を云はれてもKさんは、他人事の様に普通の顔をして居た。金曜日にKさんが缺席すると、A先生の顔は寂しかつた。皆も困つた。休みの鐘が鳴ると皆はつと息をつく、曇つたA先生の顔が扉の外に消えると、皆顔を見合せた。そして「あゝ私鐘の鳴るのを三年と待つて居たわ」「あゝ私もよ、實際代數の時間はKさんのお蔭で、息をついて居るのネ」と、泌々云つたものだ。

Kさんは、確かに頭の几帳面に働いて居る、眞面目な人に違ひなかつた。舞踏でもして上調子に騒いで居る處など、見た事がない。

一昨年だつた。地久節の式後に、私達の級が、幹事になつて園遊會を開いた。其前の日だ。

明日の準備だなんて、もう皆がはしやぎさつて、役割を定めた。

艶の無い顔をして居るKさんは、黙つて籤を引いた。皆は言ひ合せた様に、それを覗いて見た。

「あらお團子やよ」と山下さんの頓驚な聲がすると、皆どつと噓した。

「振つて、よ、松井様のお團子屋は、鳥渡上手くやつて頂戴な」と誰かKさんの肩を叩いた。Kさんは何時もの様に曇つた瞳を睨と運かさないで、只苦笑ひした許りだつた。次の日遂にKさんの姿が

見えなかつた、皆は大周章に周章で、もうKさんには懲らしめて終つた。

又Kさんは、涙の顔を友に見せた事がなかつた。

去年の春、懐しい母校を卒業やうとした日、私達は離別の悲しみに、涙の盡きる程泣いた。其時も、只茫然窓に寄つて居たKさんの眼には、悲しみの色など少しも見えなかつた。

春の日も暮れ様とする薄暗い舞踏室で、握る手も堅く最後の舞踏をして、懐かしいく母校の門を見返りがちに出た時、もうKさんの姿は見えなかつた。

夫からもう一年になる。Kさんの消息は其後ぶつとりと聞かない。

繼母

「ハイ、其位そのくらのお色氣いろけは少しもお華美はでぢや御座ございません」茶の間ちやのまで例れいの吳服ごふくやの番頭ばんとうが、繼母けいぼの氣きに合あふ様な事ことを云いつて居ゐる。

「又また繼母けいぼ様さまは」一寸眉ちよつとまゆを顰ひそめた光江みつえは、見て居みた新刊しんかんの雜誌ざっしをピタリと閉とぢて机つくえの上に置おいた。而そして傍そばの火鉢ひばちをぐいと寄よせて、白しろくなつた櫻炭さくらすすみをかき立たてた。

「什麼どうしてあゝ華美はでなんだらう」と思おもふと、例れいの様やうにむらゝと嫌いやな氣きがして、理わけ由ゆも無く繼母けいぼの仕向しむけに反抗はんかうして見みたい様やうな氣きがした。

「光江みつえ、光江みつえさんは居ゐないかえ」と角かども無なければ、優やさしくも無ない繼母けいぼの聲こゑがした。

「ハイ」とすぐ返事へんじをしたが、何故なぜ黙だまつて居ゐなかつたらうと悔くやんだ。

「お寒さむう御座ございます、毎度まいど有難ありがたう存ぞんじます」と、すかさず番頭ばんとうが、

分わけた頭あたまをペタリと下さげた。

それには碌ろく々あいさつ挨拶あいさつもしないで、

「何か御用ごよう?」と白しろくしく云いつて、繼母けいぼの傍そばへ坐すわつた。

「是これをね、私わたしの長襦袢ながじゆばんに仕様しやうと思おもふんだが、華美はでぢや無ないか知らん?」と繼母けいぼは、紅べに無し友禪ゆうぜんの縮緬ちりめんを、右みぎの腕うでに掛かけて、ずつと擴ひろ

げて見せた。

「華美ぢやありませんわ」とだけ無愛想に云ふと、

「まア繻袴は少々位ゐる華美な方が引立つからネ」と繼母はもう、それが氣に入つて堪らない様に昵と見入つて居る。

光江は自分の前に一杯擴げてある友禪を、見様ともしない。

「ぢや是に仕様かネ」其縮緬をくるくると捲き乍ら、

「お前何かいらぬかい」と通り一ぺんの事を云ふ。

「否」と光江は笑ひ顔もしないで云つたが、

「もう御用は無くて？」と繼母の顔を見て立膝になつた。

「あゝ別に用は無けれども、こんなには澤山有るんだから、何か襦

袴の袖でも見立つたら」と上へ許りで云ふ繼母の聲を皆迄聞かず

「私何も欲しかありませんの」斯う云つてもう光江は茶の間を出た。

前の火鉢の傍へ坐ると、繼母に對する反抗心よりも、優しい生み

の母を思ひ出して泣いた。

華美好きな繼母を見る度、質素で自分の事など少しも構はず、唯光

江の爲計り思つて呉れた生母を思ひ出さずには居られない。

綺麗にならした灰の中に、ぼたりと熱い涙が落ちた。

留度なく出る涙に眼が曇つて、眞紅な櫻炭が、ぼーつとなる。光

江は其眼をしばたゝさもしない。

光江の七歳の時、實母は心臓病で死んだ。父は唯一人の可愛い光

江を繼しい人の手に掛けるのは可哀想だと云つて、後妻を貫はなかつた。がそれから四年目の夏今の母を貫つた。什麼しても逃がれられない義理に迫つてだと云ふ。光江には其義理が、甚麼義理かわからない。又それを父に聞く程の勇氣も無いのである。父は繼母のする事に餘り干渉しない。それが光江は齒痒ゆくてならない。何故もつと思ふ事をばささく云はないんだらう、と始終思つて居る。

繼母は父の留守に何でも欲しいと思ふ物を買ふ、而して、夕方父が銀行から歸ると、

「良人、今日ネ是買つて戴きましたよ、私もう前から欲しいと思つ

て居たんですから」と碌に禮も云はないで、普通の様な顔をして居る。父はそれを見て別に、嫌な顔もしなければ、小言も云はないで、「フン左様か」位ゐな事を云つて居る。

何故か光江には什麼してもわからない。其「義理」と云ふ中に屹度其理由が潜んで居るのだとは思つて居る。

「光江、繼母さんが今日シヨールを買つたな」繼母が錢湯へ行つた留守になど、光江に斯う聞く、父の顔は屹度曇つて居る。其時は理由も無く父が氣の毒になる。それでも繼母の事は深く聞きもしない。云ひもしない。

「前の母様はこんなぢや無かつた」など父が溜息をつく時がある。

光江も一所に泣く事がある。

光江は尻と火鉢の中を見詰めたまゝ、色々の事を思つて泣いた。

「ハイ明後日迄には、屹度お仕立上げ致しますで御座います。お嬢様のものは何か如何様で御座いますか」と番頭の調子の好い聲がするると、

「え、光江は什麼してか、若い者の様でも無い、何にも欲がりませんから、別に」と繼母が云つた。

光江だつて女である。美しい品が欲しく無い事は無い、けれど、繼母への當附に意地でも欲しく無いと云つて居る。尤も父にも頼むのが氣の毒な様な氣もするので。

番頭は、幾つも頭を下げて歸つた。繼母は奥座敷で、箆筒の抽出を明けたりべたりし居る。光江は未だ茫然と火鉢の前に坐つて居る。夕方、例の時間に父は銀行から歸つた。
「良人、今日ネ」と又繼母が云ふのだ、と思ふとすぐむら〜と嫌な氣がした。

見立祝ひ

拜啓来る十八日長女艶子結婚見立祝ひとして粗酒進呈仕り度候
間御足勞様乍當日午前十時御光來被下度奉待上候 敬具

三月

大西千代子様

森山榮一

天井にガラスの明り窓がとつてある明るい中帳場で、字の上手い
番頭の清吉が、大奉書を四ツ切りにした紙へ落着きのある堅固した
字で斯う書いて、白い大きな封筒へ入れて丁寧に上書きをした。そ

して傍にある名前の抜き書きさらしい小さな紙へ鳥渡記をつけると、
すぐまた次の紙へ同じ事を書いては、別な人の名を書き〜して、
もう幾枚も〜書いた。

お艶はそれ から呆然と、左手をついてだれた様な恰好をし
て見て居た。

何だか自分とは別に關係のない事の様な気がして居た。けれど×
×田鶴子様、××春子様、などと大きく書かれた友達の名を見ると
急に忘れた事を思ひ出した様に胸が波立つた、そしてもう其間に一
寸の隙もなく、すぐ立派な結納や幾重ねかの紋付や派手な桶襦を思
ひ出して、そつと莞爾した。

ゆとりのある大きな家に我儘に育つた未だ十七のお艶には、恣麼
事より外何も考へる事がなかつた。

東京の大きな乾物屋、お艶は其家へお客に招かれて行く様な氣が
して居る。

「お艶さん、あのお内儀さんが呼んでお居でになりますよ」と奥の
用たしをして來たらしい小僧の信治が、店へ來しなに黄色い大きな
聲で云つた。

「さう」と、お艶はとび上つた上調子な返事をすると一緒に、ぐい
と立ち上つて、あわたいしさに奥へ驅けて行つた。そして茶の間
と座敷の間の腰高な障子を遠慮なくぐいと明けながら、

「何ですの母さん？」と甘える様な聲で云つた、そして鳥渡さまり
悪さうに顔を赤くした。座敷にはいつも來る大金の正さんが澤山な
半襟を廣げて居た。

「鳥渡來て御らん、お前まだあの板締めのも友禪縮緬の一つの方の
も半襟がかゝつて居ないぢやないの？ 眞實に母さんが氣づいてや
らなければ鳥渡も氣にしないんだもの」と母のお奈津は綺麗な半襟
を引繰り返しながら、小言がましさうに云つた。けれど何處にか、
もう可愛くて堪らない様な心持がありくと見えて居た。

正さんはお艶の顔を見ると鳥渡會釋して黙つて笑つて居た。
「どれでも好う御座んすわ、母さんのお氣に入つたので」とお艶は

矢張甘える様な小さい聲で。斯う云ひながら、お奈津の傍へ摺り寄る様に坐つて、それでも好いのを見つけ様とするらしく、あち此方と引繰り返して見た。そして三筋ばかり紫つばい派手なのを取つてお世辭の好い正さんを歸した。

中帳場の清吉は其間に四十ばかりの招待状を皆書いて終つた。書き好ささうな細筆をカチリと大きな硯箱の中へ投げる様に置くとはつとして、少しの間右手に崩れかゝつた様に重ねてある澤山な封筒の上書きの字を見るともなく昵と見詰めて居た。そして上のから順に皆抜き書きの名前と合せて見て、別に書き落ちもなかつたので鳥渡安心した様な顔をして、キチンと二つに重ねて抜き書きの紙と一

緒に、店の奥まつた、先格子の高い薄暗い帳場へ持つて行つた。「フン書けたかね、御苦勞」と軽い老眼鏡をかけた主人の榮一は大帳調べの手を休めて嬉しさうにそれを受け取つた。そしてすぐ二人の小僧にそれを配らせた。

それから五日経つた十八日の日は、もう暗い内からお艶の家はどたくして居た。朝飯が済むか済まない頃から、もう親類の人も出入りの男衆も皆

「どうも遅なほりまして」と言譯をしいくぞろく来た。男衆には皆店の者に同じ新しい印袴纏を着せた。茶の間や座敷や廣い勝手の板の間には、着物や足袋の汚れるのを氣にする様な風をした

女の人をんなひとが、皆帯の間みんなおひへ手拭てぬぐひかハンケチを挟はさんで大勢おほぜいをたたくして居ゐた。

湯殿ゆどのから上あつて来たお艶つやは他人たにんの家の様やうな気がした。何なんだか自分の居ゐる處ところではない様に思おもはれた、そつと避よける様に急いそがしく二階かいの六疊でよの小間こまへ這入はいつた。其處そこには白しろい上張うははりを着きた髪結かみゆひのお絲いとが、先まづ刻きから所在しよざいなさうにばかりくと煙草たばこを吸すつて居ゐた。そしてお艶つやの顔かほを鳥渡ちよつとみ見ると、すぐ急いそがしさうに片附かたづけてしまつた。

「御苦勞ごくちらうさん」とお艶つやは優やさしく云いつて莞爾にっこりしながら、静しづかに大おほきな新あたらしい鏡臺きやうだいの前まへへ坐すわつた。

お糸いとはすぐ後うしろへ廻まつて、昨日きのふ結ゆつたばかりの高島田かみを惜をし氣けもな

くプツリと根元ねもとに剪はさみを入れて毀こし始はじめた。お艶つやは明あるい鏡かみの面おもてへ寫うつつた自分じぶんの艶々つやした白しろい顔かほと、汚しみのある淺黒あさぐろいお絲いとの顔かほとを昵ちつと見みくらべてそつと莞爾にっこりした、そしてそつと立たてられる様やうにわけもなく嬉うれしさが込み上げて来るのを凝じつと我慢がまんして居ゐる様やうな、くすぐつたさうな顔かほをして居ゐた。「お絲いとさん、一番ばん始めにどれ着きるの？ すみれ鼠ねずみの」とお艶つやはもう嬉うれしさが耐こらえきれない様に莞爾にっこり々々しながら、鏡かみに寫うつつて居ゐるお絲いとのしかめ顔かほしてきゆつと元結もとゆひをしめて居ゐる顔かほを見みて聞きいた。

「へエわのお振袖ふりそでで御座ございますよ、其次そのつぎがお結納ゆひなふなので、それからわの桔梗納戸ききやうなんどにお着更きかへになつて、そして藤鼠ふぢねずみ、黒くろとなるので御座ございます

すよ」とお糸は其度々に自分が着更へさせてやる忙しさを思つて、矢張り嬉しさうにそわ／＼して云つた。そしてすぐ、

「どんなにまア御綺麗におなりなさるでせう、おこしらへ申す私までが眞實に嬉しう御座いますよ」と眞實にさう思つて居るらしく云つた。

「またお糸さんてばあんなこと……」とお艶は心持顔を赤くして伏目になつて云つたけれど、もう嬉しくて堪らない様な心持が判然と顔に見えて居た。

「お糸さん、もう髪が始まつて居るの？」とお奈津は上草履をバタバタと音をさせて廊下から斯う云ひながら、あわたししさうなそわ

そわした風をして這入つて来た。

そして鳥渡も落着いては居られなさうに、

「心持ち根を上げ目にネ、廻りは思ひきりゆるめてお呉れなすつてネ、どうせすぐ毀すんだから見だてのある方が好う御ざんすから……、どうかまア一つ上手くネ」とお糸には何も云はせないで一人で忙がしさうに云つて、お糸が落着いた聲で返事をして居る中に、
「仕度の時はまた手傳ひに来ますから、ぢや何分お願い申します」と云ひながらもう出て行つた。

其中にお艶の高島田は好い恰好に出来た。もう一度湯殿で顔から頸をよく洗つて、まだ少し早いけれど、と云ひながらそわ／＼お化

粧にかゝつた。お艶はたゞ人形の様になつて何でもお糸のする儘になつて居た。

好い鹽梅に鳥渡のむらもなく綺麗に散つた濃化粧が濟んで、口紅までさゝれた人形の様な顔が、判然浮き出た様に鏡に寫つて居るのを、お艶は幾度も――自分の顔かしら？　と思ひ――しては見て微笑んだ。

十一時頃からそろそろお客が見えて、二間打通にした三十幾疊の二階座敷には、たま〜謹ましい話聲と優しい笑ひ聲がして居た。八分ばかりお客の揃つた頃からお艶はお糸とお奈津とまだ二三人の親類の女に、好きな様にいぢられたり見られたりして仕度をさせ

て貰つた。絲錦の派手な丸帯を高いお太鼓に結んだ上へ紋緞子の品の好い補襦を着せられて、昵と俯向いて立つたお艶の姿を、お奈津は昵と見詰めて居る中に、もう耐えきれない程胸が一杯になつた。お艶は別にどうとも思つて居なかつた。

「仕度が出来たら早く〜」と叔父の誰かゞ障子から顔だけ出してせき立てる様に云つた。

「此紋附ですぐ親子盃なんですネ」とお奈津は聞きながら自分も手早く小紋に着更へた。

仲人に連れられて其座敷へ這入る頃からお艶は何だかぼうとしてもう夢中だつた。田鶴さんや、千代さんが居るかしらなんてそんな

事を思つて居る暇など鳥渡もなかつた。冷酒が廻されて、少しすると羽織袴の榮一と小紋の母とが皆に挨拶をして静かにお艶の前へ坐つた。さうして三ツ組の木盃が其前に出されると新宅の義叔父が、「親子別れのお盃を」と低い聲で云つた。

お艶は急に胸が一杯になつた。父からの盃を仲人に持たせられた時は、手が小さく震へた。母から受ける時はもう耐えきれない程涙がせき上げて居た。

「今日限りお前は此森山家を去つて、明日からは深美家の人となるのである。どうか今までは心を入れ變へて、親には孝に良人には貞節に、兄弟は友愛……」と榮一が静かに落着いた聲で別れの教訓

を聞かせると、お艶はもう堪らなくなつて、すゝり泣きした、廣い座敷がひつそりとしめやかになつた。

親子盃が済むとすぐお艶は着更へをする爲に仲人に連れられて座を端した。

六疊の部屋へ這入つて母の後姿を見るとお艶は張りつめて居た氣がゆるんで、人目もわすれて袴と縄つた。そして聲を立て、すゝり泣きした。

お奈津はもうさきゆつと抱き締めたい様な氣がした、けれどもすぐ思ひ返して、

「何ですよそんな泣いたりなんかして、さアすぐ着更へさせてお貰

ひ」と優しく叱る様に云つて涙をふいてやつた。お糸は云ひ様もな
く困つた様な顔をして紋附を持つて立ち膝になつて居た。

お艶はもう先刻までのやうな軽い嬉しい心持にはなれなくて、た
だ無性に切なくて堪らなかつた。それでも凝と耐へくしてお
化粧も直してもらつた、着物を着せ更へて貰つた、けれども姿見に
寫つた美しい自分の姿を見ても、鳥渡も莞爾する心持にはなれな
かつた。

里 歸り

一番番頭の周次を養子に貰つた二のお露は、三日目に七十里もあ
る周次の實家へ里歸りに行つた。それは四月の始めの日であつた。

まだ一二年は島田鬻に結つて居る積りのお露は其日も文金で行か
うと思つて居たら、郷里の方では少し好い家の女はもう嫁になつて
からは決して島田に結はないと周次に聞かされたので、急に其朝丸
鬻に直した。

其髪が始終結ひ馴れて居る島田鬻よりも、一層お露のふつくりし

た面長な顔を可愛く見せた。

お露は髪ばかり気にしながら、人形の様になつて温順しくお化粧をして貰つたり派手な大島お召の道中着を着せて貰つたりした。

そして幾つかの新らしい柳行李を少し先へ遣つて其後からお露夫婦は両親と横山町の叔父叔母に連れられて、六臺の車を勢よく上野のステーションへ飛ばせた。ステーションにはもう番頭の豊吉が先に立つて、出入の者と一緒に甲斐々々しく荷物の運びをつけて居た。

紺色の新らしい印神纏の脊中へ、皆同じ様に二と大きく染め抜いてあるのが、お露には極立つて目について、それが何となく嬉しい

様な心好さを思はせた。

皆に送られて割合に隙いて居る二等室の窓際へ、お露は周次と列んで腰掛けた。そして少し気が落ち付いて来ると、お露はわざと自分から離れる様にして居る周次の仙臺平の袴に染めの好い斜子の紋付を着て居る横姿をちらと見ては、幾度となく新らしく胸を波立たせて居た。

髪の少し剃げた横山町の叔父と、太い金鎖を袴の紐へからませたお露の父とはもう一生懸命になつて取引きの事を話し始めた。手持ち無沙汰さうに巻煙草ばかり吸つて居る周次もたま／＼は其間へ口を挟んで居た。お召のコートの下へ同じ様に白襟を見せて居る叔母

とお露の母のお加代も何か世間話しを面白さうに始めた。けれどお露ばかりは其處へ口を出さうともしないで、少し俯向いて恍惚した様な可愛い顔をして、今夜着く周次の家の事をそれからそれと止度なく想つて見て居た。

汽車は幾つかのトンネルと陰気な雪除けの中を三つ四つ通つて、皆がもうつくづく倦きた様な顔をして居る頃よう／＼越後の××驛へついた。

ガラツと晴れた氣持りの好い信州の高原を通り過ぎると、急に覆ひ被せられる様な陰気な空合ひになつて、××驛へ着いた時は今にも何か降りさらな模様だつた。

突然に行つたつて大抵は車がない、とよく周次が話した程の小さな其驛では、二等室から下車りたお露達を、皆人が物珍らしさうにちろ／＼見て居た。

僅か十四五人も下車りた人達と一緒に情けない程小さな短かいプラットホームを通つて改札口を出ると、其處には六臺の車が待つて居て、親方らしい一番年上の車夫が周次の顔を見るとすぐ、「よう、お待ち申してをりました、さアどうか」と眞實に待つて居たらしい、懐しさうな顔をして丁寧云つた。

「ヤア御苦勞、暫くだつたネ」と周次も馴れ／＼しさらしに聲を掛け

周次の後に隠れる様にして居たお露は、それが何となく、斯う田舎らしい親しみのある様な気がして懐かしい気がした。

毎日雨が雪でも降つて居るらしい酷い泥濘の道を、今下車りた人達は高い足駄を履いて泥跳を上げない様に静かに、板屋根に石の載つた寂しい町を歩いて行つた。越後はよく雨や雪の降る陰気な國だと周次がよく云つた事をお露はすぐ思ひ出した。

「何だか嫌な天気だね、毎日降るのかネ」と周次は車に乗りながら、お露を載せた先刻の車夫に聞いた。

「へエどうも、昨日なんざア一日中曇が降つてをりまして……、今日はアお客様のおいでだにどうか降らしたくねーと思つてをりま

したら好い鹽梅に今まで降らずに持ち耐えてをりましたが、何だか此鹽梅ぢや途中で降りやしまいかと思ひますが」と、取つて置きらしい新らしいフラン天の膝掛けをお露の膝へ掛けながら愛想よく云つた。そして

「其方の端から順に出したく」と大きな聲で云つた。するとお露の父を載せた車夫が

「よしきた」と勢の好い聲で云つてすぐ引き出した。お露の車が一番終ひになつた。平な道をゴム輪にばかり乗つて居るお露は、ガタンと強く揺ぶられる度に、ガクリと強く丸鬚の根がゆるむ様な気がして其度に恰好の好い眉を自烈つたさうに顰めた。

眞直な少し坂になつて居る一本町を通り過ぎると、もう街端れになつて、まだ青い芽を出さうともして居ない枯野の様な田圃が廣く見え出した。

大きな木や森も遠くに見えるけれども、皆冬枯れの様な色をして居るので、もう十日も立つたらお花見に行く積りになつて居たお露には、急にまた二月頃にでも引き戻された様な気がして、斯う寂しい泣きたい様な氣持ちがした、そしていくら行つてもくお露に目新らしく思はせる様なものはなかつた。一里といふ筈の道がもう二里も三里も来た様な氣がするのにまだ少しもそれらしい家はなかつた。もう遠くからどんな家でも目に入ると、屹度今度こそはと思つ

て、何か明るいものでも見當てた様な氣がして居ると、それは見る影もない荒家だつたり、また新らしい様な茅葺の家でも車夫は止まらうともしないで知らない顔して行き過ぎたりして終つた。

其内にポツリ／＼と霏混りの雨が降り出した。車夫はあわたしさに雨用意をした。お露は黒い前覆ひを掛けられて、もう延び上げる様にしなければよく外が見えなくなつて終つたので、仕方なささうに無理に氣を落ちつけて目を潰つて居た。けれど少し立つと、そつと覗く様に覆ひの上から向ふを見ては、其度に落膽した様な顔をしていら／＼して居た。

新らしく垣根を結び直したらしい、可成り廣さうな或る家へ六臺

の車が勢よく引き込まれたのは、もう暗くなり始めた、そして一しきり霏の酷く降り出した時であつた。

玄關の框が漆を塗つた様に黒く光つた田舎らしい廣い入口に立つた時、お露の目には淡暗い取次にずらりと出迎へられた女の人の白い角隠しばかりが極立つて目についた。

祝儀の席にだけついて、すぐ其晩大急ぎに夜行で歸つた周次の父と本家の伯父といふ白い髯を生した人と二人が、きちんとした堅苦しい羽織袴で框の上へ手をついて丁寧に出迎へた。お露は質朴なそして禮儀に堅い田舎の人に對して、自分が略した道中着などで來たのが、何だか肩身の狭い様の恥しい氣がした。

皆の後からお露は何となく不安な心持ちをしながら、上へ上ると、天井の高い古い家の中に新しい疊の薫りが氣持ちよく漂よつて居た。

丸ぼやの臺ランプが淡暗く點いた間取りの廣い部屋を三つばかり通つて、炬燵のある小じんまりした八疊の部屋へ案内された。狭苦しい小さな部屋に瓦斯や電氣ばかり映しい程明るく點いた處に居馴れたお露は、斯うお寺のお厨へでも來た様な、何だかそこいらが取りとめのない様な變な氣持ちがした。

お茶が一つ出るとお露はすぐ丸髻に似合ふ様な少し色氣の質素な留袖の紋付に着變へさせて貰つた。そして少し待つて居ると、ちや

んと白扇はくせんを持つた本家ほんけの伯父おぢといふ人ひとが、
 「御休憩おやすみになりましたら、どうぞ家内かないの者ものに一寸御挨拶ごあいさつを」と敷居しき際に手てをついて云いつた。

お露つゆは皆みんなと一緒に次つぎの廣ひろい座敷ざしきへ行いつて、お加代かよの傍そばへ慎つまじさうに俯うつせ向むいて坐すわつた。と下座しもざの方ほうへ先刻まつきで出迎でむかへた角隠つのかくしを被かぶつた女ひとなどが五六人にんずり坐すわつて、周次しうじの父ちちが、

「え、これが私わたくしの母ははで御ございまして」と今年ことし七十九歳さいになるとかいふ周次しうじの祖母そぼからだん／＼に紹介ひきあはした。お露つゆは誰だれが誰だれかよく見様みようともしないのでたゞ俯うつせ向むいたまゝ、丁寧ていねいに頭あたまばかり下さげて居ゐた。

其晩そのばんはお疲つかれになつたらうからと九時頃じごころも床とこをとつて呉くれた。

そして皆みんなすぐ床とこに就ついた、けれどお露つゆはなか／＼眠ねむられさうにもしなかつた。眠ねむらうとすれば猶裏庭なほうらにわの池いけや大おほきな木きへばら／＼とわたる雲みぞれの音ねが氣きになつて、終しまひには自裂じれつたくなつた。

「どうも生憎あいにく降りまして、何も御馳走ごちそうが御ございませぬので名物めいぶつの雪ゆきでもお目めにかけ様やうといふ積つもりで御ございませうが」とお夕飯ゆふはんの時ときに本家ほんの伯父おぢが笑わらひながら云いつた事ことや、

「斯かう降りますのは屹度きつと周次しうじのお精進しやうじんが悪わるかつたんで御座ございませう」と父ちちに云いはれて、仕方しかたなささうに、

「どうも左様さようかも知れませぬ」と周次しうじが頭あたまを痒かいた、こんな詰つまらない事ことなど、まづお露つゆは思おもひ出だした。

少しうとくしたと思つて目を覺すと、高い格子になつた欄間から、もう朝の明るい色がさして居た。夜通し降つて居た雲は晴れた様であつた。そして離れた向ふの勝手の方からは、がや／＼と忙がしさうな大勢の人の聲が氣持ちよく聞えて居た。横山町の叔父が床の中に腹ばひになつて、甘味さうにゆつくりと煙草を吸つて居た。お露は母や横山町の叔母と一緒に起きた、けれど勝手が解らないので何すれば好いか解らない様な變なものであつた。其内に「お手水はどうぞ此方へ」と手傳ひの人らしい新らしい手織り木綿の着物をどつ／＼着た男に案内されてお露は母と二人で先へ湯殿へ行つた。處々新木で直してある狭い湯殿には齒磨きも楊子も揃へて

あつた。湯殿に似合はない大きな鏡もあつた。いつも獨で手際よくお化粧するお露も何となく窮屈な様で思ふ様に仕憎かつた。なで附けの上手な横山町の叔母が結ひ立ての様に髪を綺麗に梳して呉れて、母のお加代がお化粧を直して呉れた。十時頃からそろそろお客が見え始めた様であつた。叔母や母も皆紋付に着かへて席へついて、若松の品の好い模様の黒紋付に、すみれ鼠の緞子に千羽鶴を飛ばせた派手な補襦を恰好よく着せられたお露が只獨り手持ち無沙汰さうにして居ると、お露を連れて挨拶に出る爲に周次の母が入つて來た。骨太な恰好の悪い體

軀へ、ごろ／＼する程白襟を重ねて、色の古い斜子の黒紋付を前へ
 はだけた様に着て居た。そしてもう三十年も其上も前の嫁入りの時
 のらしい白ぼいごは／＼する様な丸帯を、昔の繪によく見る様に前
 で結んでだらりとさげて、其上へ唐草の模様のある綿縹珍の袴襦を
 長く引摺つて居た。「もう仕度は好いけえ？」と立つたまゝ、潤ひのな
 い茶色の目でじろりと見られて斯う云はれた時、お露は姑！ とい
 ふ親しみのある心持ちにはどうしてもなれなかつた。
 二十人ばかりのお客の前へ、静かに挨拶に出た繪に晝た様な嫁と、
 すくだまつた様に不恰好な、そして少しもおつとりした落着きと品
 のない姑とは、あまりに不釣合ひであつた。

晩には近所の人や手傳ひに來た人の披露と御苦勞招びとを兼ねた
 賑やかなお客立てがあつた。
 質素な田舎の人の目をあまり際立たせんもと斟酌して派手な振袖
 は皆置いて來たお露は、晩にも矢張り丸帯に似合ふ様な鼠が、つた
 藤納戸の留袖を着様としたら、
 「あの濟みやせんが、どうかこれを着て呉んなさい」と周次の母が
 赤の勝つた小豆色の大振袖を一重ね、やつと抱く様にして持つて來
 た。お露達は皆喫驚した様な顔をして手を休めて其方を見た。
 「どうも土地の習慣で御せいで此御苦勞招びの時には數の多く
 着る程好い事になつてをりやすで、私の着古しで氣持ち悪からうが

嫌でも着て呉んなさい、九枚ぢやまだ少し少ねえかも知んねえけん
ど」と皆の顔もきよろしく見ながら、鳥渡極り悪るさうな笑ひ方を
して云つた。

「まア左様で御ざいますか、皆其處々で違ひますからネ、ぢやお氣
の毒で御ざいますけれど鳥渡それを拜借いたしますよ、どうもとん
だ御心配をかけまして」とお露の母は優しみのある聲で氣輕さうに
云つた。そしてお露は緋縮緬のそれでも雙の長襦袢や、淺黄色の下着
二三杯重なつた、もう三十年も前のしぼの無い様な薄い縮緬の振袖
を恰好も何もなく九枚着せられた。そしてまだ其上やくざ芝居のお
姫様が着る様な袂の先へずつと房のついた綿金襴の補襦を掛けられ

た。

髪へは本籠甲の花簪がさゝつて居るのをわざと抜いて、銀のび
ら／＼の下つた櫻に蝶の大きな簪を二ツ後へさして呉れた。お露は
さぞ田舎の嫁らしくなつたらうと思ふと可笑しくなつた。そしてこ
れならお姑様に連れられて出ても吃度調和るだらうと思つた。と何
となく嫌な氣持ちが鳥渡した。

「さあ私より一間ばかり離れて来て呉んなせえ」と周次の母は晝の
通りな仕度で先へ立つた。お露は歩き憎くさうな風をして其後へつ
いて行つた。そして玄關の前を通ると、もう村の者が一杯に立つて
見て居た。お露はこんな時すらりつとして二枚重ねの品の好い振袖

姿を見せて遣りたい様な気がして、不恰好に着せられた自分の其姿が自烈たくて堪らなかつた。

晝間の時の様に丁寧にお叩頭をしてそして少し立つてから上目で見ない様な風をしてそこいらを見ると、女の人でも皆縞のまつくした様な着物を着てお膳について居た。なかには前掛なんか掛けて居る人もあつた。

「さア一つお願ひ申やす」と誰か云ふと、床の間の前へ坐つて居た三十位ゐの婆さんが、顔に似合はない若い澄んだ聲で、松前節を唄つた、座がしーんとして其聲が消えると、後の方ではらりーつとはだか豆を撒いた、お露は何をされるのかと思つて喫驚した。

さうして四五人矢張り同じ様な好い聲で唄つた、其度に周次の母は丁寧にお叩頭をするのでお露も真似して頭を下げた、そして静かに上げ様とするその頭の上へ、いつもばらりーつと節分の時の様に豆を撒かれた。

「もう出さうも無えすけ引き取つてお呉んなせえ、御苦勞さんで御座えました」と先刻一番始めに唄つた婆さんがいふと、

「有難う御座えます」と周次の母がまた一つ丁寧にお叩頭をして座を立つた。お露も其通りにして後をついて前の八疊の間へ引き取た。

そして今度は先刻着やうとした蝶模様の留袖に着變へて、周次と一緒に座敷へ出直して膳に附いた。もう其頃は太分座敷が賑やかに

なつて居た。越後の女は聲が好いといふ事を聞いて居たけれど、眞實だと思つて、お露は皆の唄ふ追分節をじつと聞惚れて居た。

其内に眞黒な髭面を頭巾で隠して、妙な恰好に振袖を着た人と、行脚僧の様な風をした人と出て春駒といふ踊りを始めた。そしてそれが濟むとすぐ三四人で賑やかな皿叩きといふ兩手の指の間へ小皿を挟んで踊りながらカチリ〜と調子を合せる踊りを陽氣に始め出した。唄の調子は盆踊りに似たものであつた。

廻りのお膳について居る人はお酒を呑む事も忘れて、絶えず面白さうに手拍子を取つてやつて居た。そしては彼方でも此方でもどつと崩れる様な、もう心から面白さうな笑ひ方をして居た。お露はた

だ珍しいので呆氣に取られた様な顔をして始終貫ひ笑をして居た。其内に皆調子にのつてお膳の上の物が埃になるのも知らないで、總立ちになつて盆踊りの様なものを始めた。七十九になる周次の祖母までが嬉しさうに其中へ混つて莞爾々々して居た。

好い加減のところ周次の父が氣づいてお露達を皆八疊へ引き取つて貰つた。小ぢんまりした炬燵の廻りへ圓くなると、皆さもがつかりした様な顔をした。そして誰の顔にもまだ珍らしさうに微笑んで居た。今までの其柔かな色は消えないで居た。

「土地が變れば眞實妙な事をするものだなア」と一番先に横山町の叔父が云ひだした。

二間離れた座敷では、まだ容易には納まりさうもない賑やかさがいつまでも續いて居た。

お露達の寝たのは夜中の二時頃であつた。お露は其晩もなかく眠られなかつた。

「露さんさア早くしないと汽車に間に合ひませんよ」と横山町の叔母に起されたのはもう七時すぎで皆朝茶を飲んで居た時であつた。お露は目を覺すと何だか昨晚の事が夢の様な氣がした。軽く鬢の毛をかき上げながら、右側にまだ目を覺して床の中に居た周次の顔を見て莞爾した。

(町むすめ終)

(不許複製)

女子文壇叢書第一編
町むすめ

明治四十五年八月九日印刷
明治四十五年八月九日發行

定價金參拾錢

編輯者兼
發行者

東京市京橋區大鋸町十一番地
野口竹次郎

印刷者

東京市芝區愛宕町三丁目十四番地
金崎金平

印刷所

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
東洋印刷株式會社

出版元

東京市京橋區大鋸町十一番地
(電話京橋六〇七番) 女子文壇社

(振替貯金口座) 東京一七二九番

全國到處書店取次販賣

書叢壇文子女

新しき時代の産める新しき女の集りとして、隠然たる勢力を養ひつゝあるは、わが女子文壇なり、女子文壇を舞臺として自由に歌ひ、自由に舞ひ、且自由に語る彼等若き女の群集は、刻一刻其視野を擴大し、其心眼を開きつつあり。本社此處に見るところありて其中の或る人々の作物、即ち或は小説に、或は告白文に、或は詩歌に、各自其長所とする作物を一冊に集め、女子文壇叢書と名づけ逐次刊行せんとす。之れ蓋し暗黒なる婦人界の要求に應じて、新しく投げられたる一炬火なり、乞ふ、其光に照らして或は悶え或は激する若き婦人達がありのまゝの姿を見よ。

逐次刊行 ● 定價一冊參拾錢

横瀬夜雨先生著 (再版)

夜雨集

全壹冊 紙數三百三十頁 中判本綴美裝 特製金八拾錢 並製金五拾錢 送料各六拾錢

◀ 日書版出社壇文子女 ▶

報知新聞 國民新聞 大阪每日 萬朝報 四新聞 新新聞 好評

凡そ勝れた文學は「生」そのまゝに物を觀る時に産れるものだ云ふ、してみると著者夜雨の如く、在るがまゝの現實に生きて、諦めもせず、悟りもせず、憤るものは憤り、怨むものは怨み、泣くにも泣かず、笑ふにも笑はれぬ悶々の情を、破れ鏡より進る泉のやうに滾々と文字に表はすことの出来るものは、最も好い藝術家に生れた一人であらう。而かも夜雨の所有してゐる「生活」は、普通の人の所有してゐる「生活」と全く異つた暗い、淋しい、痛ましい、呪はれた生活である。一に身體の自由を奪はれ、歡樂を奪はれ、戀愛を奪はれ、在る處は只文字のみ。

東宮侍講本居豐頼先生題詠
文學博士小杉楓郁先生序文
下田 歌子先生題詠

國文學士小森松風先生編

子女美文作法

全一冊 大判二百三十頁
寫眞筆蹟洋裝美木
特價金貳拾錢
送料金四錢

美文の作り方を最も明瞭に解説し、加ふるに大家の美文を模範として挙げたれば、文章を作り、文章を愛する諸嬢には、寸時も座右を離すべからざる良書なり
報知新聞記者 中村木公先生編

實地精査 女子遊學便覽

全一冊 中判長寫眞肖像洋裝
特價金拾五錢
送料金四錢

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め、自ら學校の選擇に迷ふ諸嬢も之を讀め、一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

いたづら作者
小僧日記

佐々木邦先生著

(再版)

滑稽 奇拔 一人やんちゃん

全一冊 中判洋裝美木
武田壽畫伯挿畫入
定價金參拾五錢
送料金六錢

目次
二人やんちゃん。あまのじやく。
仙ポユ。お猿さん。昔と今

大人にも、子供にも面白い書物です。世の中に出ると、到る處評判になつて、何處の家庭でも争ふて購求され。近頃の好著として、持て囃されて居ります。速に愛讀あらんことを乞ふ。(諸新聞好評)

一 每 月 發 行 日

女 子 文 壇

一、四、七、十月一日は特別號とす
特 價 金 參 拾 錢 送 料 貳 錢
其 他 の 月 は 皆 普 通 號 送 料
定 價 金 拾 五 錢 壹 錢 五 厘

(本誌は廿八年一月の創刊なり)

女子文壇は若き婦人の間に毎に評判となる雑誌なり。
他の婦人雑誌とは異りて最も進歩的なり、現代的なり、
特色顯著、試に其一冊を繙き給へ。

口 繪 插 畫 澤 山 鮮 麗

廉 價 一 冊 金 七 錢

送 料 五 厘

お 伽 世 界

一 每 月 發 行 日
本誌は世界一の少年少女雑誌です、價が廉くて綺麗で爲
になつて面白い、こんな雑誌は外にありません。之を讀め
ば、知らず識らずの中に、賢い立派な人になれます。

270
347

終



編壹第書叢壇文子女

作子梨優島前